
Wine collection

塩結G音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wine collection

【Nコード】

N75430

【作者名】

塩結G音

【あらすじ】

四人の英雄の物語。

今回はダイダイ・アジュガ。

「おうおう。どうゆうことかい」

2メートルを越える半裸の男が見るからに機嫌悪く歩いている。まとうのは腰布だけ、筋肉で膨れた上半身を守るものはない。

銀色のオールバックで、背負うはその身長と同じく長くこついい片刃。

それが怒りながら歩いているのだ、皆が家へと隠れる。

「何で酒場が一つもないんだよ。」

「おつ。ここ、でかい家」

「誰の家だ？」

「知らん」

大男はずかずかと入っていった。

表の看板にはフローレン村・村長、とあった。

「ご用件はなんでしょうか？」

初老の口ひげがある男、村長が対応に当った。

向かい合って座る。大男の椅子は悲鳴をあげた。

「ここはフローレン村だよな？」

「そうですか」

「俺はこの酒が美味いと聞いてやってきた」

「それは、ありがとうございます。」

私達が精魂込めたワインですからね」

「だが、だ」

大男は前傾姿勢になった。村長はのけぞる。

「酒場が一つもない、ってのはどういうことかい。」

俺はな、それだけを楽しみにここまで来たんだぞ」

「それは、すみません」

老人が軽く頭を下げる。

「しかし、ここは卸しているだけで、貯蔵するほど、直接売れるほど作れないのです。」

それに村に来るのは卸しの商人だけなので、宿屋さえあればいいという状態です。」

「そう、なのか？」

「あほ」

「ふんっ」

村長は辺りを見た。同じ部屋にいるのはこの大男だけなのに、今の声は誰だろう。

「おう、邪魔したな」

「あ、待ってください。冒険者さんっ！！」

老人の呼びに大男は止まった。

「お酒を、用意できますよ」

「で、俺は何処に向かつてるんだ？アジュガ？」

大男は馬車を走らせながら尋ねた。

ホ口のない荷台には誰もいない。

いや、

「聞いてなかったのか」

「いや、聞いてたさ」

大男の、荷台にかかっていた影が立ち上がった。

「オーク（豚顔のヒューマノイド）の根城に奪われたワイン樽を取りに行っている」

影は立体の肉体を得、姿は大男のとは違う形になった。大男の影は残ったままだ。

彼がアジュガである。先ほど村長の時にもいた第三者だ。

短い髪を立て、細い身体は黒いマントを着ている。腰に大きな袋を持つ。全身、影の黒。

「それが美味しいのか？」

「それでも構わないが、依頼はその酒を今日中に村に届けることだ」

「なんでだ？」

「その樽には新作が入っていて、それを明日、バイゼルの人が取りに来る。」

その礼で酒を準備してくれるとのことだが」

「バイゼル？ああ、あの焼肉が美味かった街な」

大男が手綱を引く。2頭の馬が駆ける。

「で、俺らは何処に向かつてるんだ？」

その言葉にアジュガは再び影に戻る事にした。

「おい、アジュガ」

「ここだな」

到着場所は山から石壁が突出した形になったおかしい場所であった。

「ダイダイっ」

「あんだよ」

影、アジュガが大男、ダイダイに声をかける。

「断っておくが、俺はお前を殺すために、付いて歩いてるんだからな。」

最後の最後は、助けんぞ」

「ああ、知つてら」

ダイダイは笑んで歩を進めた。アジュガはいつも言う。
厄除けの言葉だろうか。

「で、どうやって入るんだろうな」

扉らしきものは発見したがそこに取っ手はない。

石壁に囲まれ、壁と同質で壁より一枚奥にある扉。

押すも引くも横に動かすも難しそうだ。

よく見ようとダイダイが扉に近づく。

「ダイダイ！」

上ばかり見ていたダイダイにアジュガが警告する。

床が、一枚だけ赤いタイルがあり、それにダイダイが足を向けているのだ。

「あん？」

振り返るダイダイはちょうど、赤タイルの上に足を置いた。

と、同時に扉が横に開いた。

「おおつ。おい、開いたぞ」

歓び赤いタイルから離れ扉に足を向ける。

再び扉が一気にしまった。後ろを見ながら歩いたダイダイは見事に鼻先をぶつけた。

「いてつ。」

なんだよ、さっきは開いてたのに。トラップか？」

両腕を扉に当てる。腕の筋が膨れた。

ドンつ。ボタン。

石扉は向こうに外れ落ちた。

「これで開いたな」

開閉式のトラップであろう、赤タイルの上に何かを置けばよかっただろうに、そう影の中でアジュガは思った。

入ってすぐは廊下みたいな感じだ。上から明かりが照らす。

左手に二つの扉、奥にも扉らしきものがある。

「お？」

ダイダイは右手の壁に長方形の何かをはがした跡がある。

「なんだろな、これ？」

その四角を指でなぞってみる。

しかしアジュガが返答しないのでやめた。

「何処から行く？」

「手前から、順番にだな」

その扉も入り口と同じく取っ手がなく、入り口と同じく赤タイルがあった。

アジユガがコインを置くことを教えると、確かに扉が開いた。

「おお、すげえ」

ダイダイは感動している。

部屋の中は正方形で、黒い箱が置いてあった。

ダイダイが部屋に入るとファンファーレが突然鳴り響いた。

身構えるダイダイ、影から飛び出し臨戦態勢になるアジユガ。

しかし目の前に現れたのはタキシードを着た、幻影。

「なんだ、これ？」

「ソリダスター、なら分かるかもしれんが」

アジユガも首をひねった。

ソリダスターとはダイダイたちと旅を共にする頭脳担当の僧侶。

今回はお休み。

タキシードは口を開いた。

「力の間へようこそ。ここでは君たちの力が試される。優秀な成績をあげたときには、豪華な賞品が待ってるぞ。」

代金はたったの金貨一枚！君の参加をまってるぞ」

人影は帽子を逆さに持ち、コインを投げ入れるのを待ってる風だ。

「おっ」

ダイダイは嬉しそうに小銭入れをさぐる。

「畏かもしれんぞ」

アジユガが警告する。

「畏なら、お前と一緒に壊すだけさ」

ダイダイはコインを一枚放り投げた。

タキシードが姿勢を正した。

「ルールを説明しよう。次に現れる目標を3回殴ってくれ。合計のダメージがモンスター以上なら君の勝ち、小さければ君の負けだ。

なお武器の使用は自由だが魔法の使用は反則だ。また、一度に殴りかけられるのは一人だけにしてくれ。ただし選手の交代はかまわないぞ。

反則と認められた場合、それ相応のペナルティーが課せられるから気をつけるように」

「おっしゃっ」

ダイダイは拳を打ち合わせた。

「使わないのか、ソレ」

危険はないと判断したアジュガは影に半身を沈めた。

ソレと指したのはダイダイが背負う大刀。

「いらねーだろ」

ダイダイは自信満々に太い二の腕を振るう。

タキシードが消え、代わりにミノタウロスが現れた。

それはダイダイと同じ体格だった。

「一発目！！」

大降りの拳をミノタウロスの顔に向け、振り下ろす。

と、ヒットした瞬間、ミノタウロスは姿を消した。

「あん？」

ダイダイは拳を構えなおしていた。

そして現れたのは先のタキシードだ。

「おめでとう！賞品を受け取ってくれたまえ」

そういつてコインを2枚、放り投げる。一撃で容量をオーバーしたのだ。

慌ててキャッチするダイダイ、影に当てられるアジュガ。

力が少し、上昇した気がした。投げられたコインは消えた。

タキシードは姿を消す。後には黒い箱があるだけだ。

もう反応は、ない。

先がないなら戻るしかない。

「なんだよ、あれだけかよ」

せっかく全力を出せる相手を見つけたのに。ダイダイは不服だった。

2つ目の扉も赤タイルがあった。

それに足を置くと扉が開く、外すと扉が閉まる。
「すげえ」

ダイダイは何度も何度も繰り返した。何十回も。
退屈になったアジユガはひとり、影から出て部屋に入った。

先ほどと同じく正方形の部屋、黒い箱。

ただ、ここには更に奥に扉と赤タイルがあつた。

バニーガール姿の女性の幻影が現れた。

「技の間へようこそ。ここではあなたたちの技が試されます。優秀な成績をあげたときには、豪華な賞品が待ってますよ。」

代金は金貨1枚です。あなたの参加をお待ちしてます」
とカゴを前に差し出した。

アジユガは少し戻り、扉で遊ぶダイダイから金貨を一枚もらった。
いや盗んだ。

アジユガ：表職業・怪盗。金を持ち歩かない。

「ルールを説明します。この3本のダーク（柄の太いナイフ）のうち、一本でも標的に命中させればあなたの勝ち。

三本とも外せばあなたの負けです。じゃあ、ガンバってくださいね」

バニーガールはダークを渡すと姿を消した。

10m先に15?程度の丸が浮かび上がった。

アジユガは一歩足を進めた。すると的が一分分奥へ移動した。

そのままアジユガが壁まで歩いて的は10m先に見える。

仕方なく彼は元の位置に戻り、ダークを構え、放った。

一発でダークは的の中央に刺さった。

的は姿を消し、バニーガールが戻ってくる。

すぐさま、彼女に向けてダークを構えたアジユガだが、ダークは手から消えてしまった。

「おめでとございます！では、賞品をお受け取りください」

バーニャールの手から鳩が一羽、飛び立つ。

反射的に手刀を振り下ろすアジュガだが当る瞬間、鳩は姿を消した。

アジュガの器用さが少し上昇した。

バーニャールも姿を消した。

アジュガは一人、先の扉、赤タイルに足を進めたが今度は開かない。

扉を見ると『関係者以外立ち入り禁止』とある。

アジュガは扉に密着すると影に戻り、扉の向こう側へと移動した。しかし奥は潰れており、見るものは何もなかった。

仕方ないのでダイダイの所まで戻った。

ダイダイは未だに扉で遊んでいた。

「行かないのか？」

アジュガは廊下の奥を指差す。

「ああ、そうだったな」

ダイダイは目的を忘れていた。

アジュガは彼の影に入り込んだ。

「確かに、満足できないな」

アジュガが言った意味がダイダイには分からなかった。

聞いても馬鹿にされるだろうから聞かない事にした。

奥に進むと今までの岩壁が天然の洞窟へと変わっていた。

壁が歪み、穴を明けられている。そこから土壁だ。明かりがなくなる。

ダイダイは背負い袋からランタンを取り出した。

少し進むと大きな水溜りがある。

多少濁ってはいるが水にしか見えない。

ダイダイは勢いをつけてそれを飛び越えた。

アジュガはその影にもぐりこんで越えた。

真直ぐ行く大きな道と左へ行く道があったので左による事にした。

その先は部屋になっており、ボロイテーブルや椅子が並ぶ。

そこには4匹のオークが掛けている。

「&\$%#””””?!\$&)#!!」

「なんだって？」

オークがわめき散らす但ダイダイには理解できなかった。

しかし尋ねられても影にもぐったアジュガは答えるつもりはなかった。

「ちえっ」

ダイダイが舌打するよりも速く、一匹が斧を手に踊りかかってきた。

「よっと」

鼻先でかわし、背負った太刀で抜くと同時に兜割り。

その太刀は無様で、長方形の鉄板の片側に刃が付いただけの代物であった。

柄も刃背を延ばして作られている。鏢もない。

つまるところ、巨大なナタだ。馬鹿でかいナタ。

続いて襲い掛かってくる2匹目3匹目を両手で持ったそれで胴を一気に薙ぎ切る。

しかし、ここでアクシデント。

大きく振り回した太刀がテーブルに妙な角度で刺さり、固定されてしまった。

「おっ」

慌ててダイダイは刃を引くがその力でテーブルごと動く始末。

残った一匹がナイフを手に近づく。

「おっ、ちよっと待った!!」

右手で静止を呼びかけながら左手で太刀を引くがどうにも抜けな

い。

するとオークは立ち止まった。

そして前に倒れこんだ。

「馬鹿」

その後ろには暗くてよく見えない、いや黒い男・アジュガが立っていた。

手には巨大な3本の鉤爪を持つ棒が握られていた。

「わ、わりい」

「こういう狭い場所で、大きな武器を振り回すな」

アジュガは注意しながら辺りを伺う。

と、オークが座っていた付近に小箱が転がっていた。

他には碎けたテーブルしか見当たらない。

アジュガは慎重に箱を叩く。

「トラップか」

彼の腕では構造がすぐに分かった。

箱をひっくり返してから、開ける。

金貨100枚と小さなルビーが入っていた。

荷袋を持たないアジュガはダイダイに示した。

通りに戻り先へ進むと右へ外れる道があるのでそれに向かった。

細い道のまま、進んでいると頭上に羽音が聞こえる。

ランタンを持ち上げると蝙蝠が集団で見える。

「アジュガ、頼まあ」

ダイダイが一步下がると影がその場に残った。

影が立ち上がる。

「ふんっ」

アジュガの手には先ほどとは違い、長い長い鞭が握られていた。蝙蝠たちが踊りかかってくる。

それを右腕一本で振るう鞭で的確に打ち落としていった。

パン パン パン……

全てを打ち落とすと前方を向いたまま、後ろにいるダイダイに鞭を向けた。

「おっと、なんのつもりだ」

半身になって避けるダイダイが睨みつける。

「すまん、ミスだ」

アジュガは顔全体が黒いため表情が分かりづらいが、それでも確かに笑っていた。

細い道を行くと崩落が起こり、進めなくなった。

太い道に戻り、先へ進むとまた右への道があったのでそちらへ行く。

「なあ、今頃ソリダスターとヒエンはどうしてるだろう？」

通路の途中、影に潜ってるアジュガに声をかける。

ヒエンも彼らの仲間。今はソリダスターと行動を共にしてる。

「知らん」

「……」

「……」

「会話が進まねえじゃねえか」

「ああ、すまん」

「……」

「……」

「お前よお、もう少しコミニケーションって奴をだ」

足元は急な下り坂だった。

「なあ！！」

コミニケーション？ 勢いよく転がるダイダイの影の中でアジュガは彼の言葉を反芻していた。

「いてててて」

ダイダイは腰を擦りながら立ち上がる。ランタンは、無事だ。それを掲げながら辺りを伺うと腐臭が鼻をつく。

そこは大きく広げられた部屋で生ゴミ、ボロ切れがあたりにたまっていた。

何か動く気配がする。

そちらにランタンを向けると2mのジャイアント・コックローチ（巨大ゴキブリ）が一匹餌かと近づいてくる。

「アジュガッ」

ダイダイは友の名を呼びながら一步下がったが影は彼の後ろにあるままだ。

「めんどくさがり屋め」

コックローチは羽を広げてこちらに飛び掛ってきた。

先ほどのアドバイスを聞いて、ダイダイは一步踏み入って右ストレート。

それは見事にコックローチの顔面（？）を貫通した。動いていた羽も、ゆっくりと止まる。

「ふっ」

余裕を持って、拳を引き抜くと一気に腐臭が強まった。

右腕に何か液体が大量に付いている。それを鼻に向けるダイダイ。

「くうっせゝゝえ」

ダイダイは頭の奥がジンジンしびれる感覚を味わった。

彼は人一倍鼻がいいのだ。いつもは気にしないが。

影の中からアジュガが毒づく。

「相手も見えて武器を選べ。あほ」

「くうっせゝゝえ」

いつも持ち歩くダイダイの寝酒（度数56）を全て腕にかけるがましになった程度だった。

このゴミ捨て場も行き止まりなので通りに戻る。

すると左に開けた道と、前に続く道へと分かれていた。

「次は、どっちへ行く？」

ダイダイが尋ねる。

「左は、大きな気配がある。前は分かん」

「じゃ、こっちだな」

ダイダイは前方へ足を進める。

「怖気づいたか？」

「まさか。楽しみは最後に取っとくんだよ」

返事を聞いて、アジュガは鼻で笑った。

進むと角から明かりが見える。

そこを曲がると、シャベルやつるはしを持つゴブリン（小柄なヒューマノイド）が4匹、鞭を持つオーク1匹がいた。

彼らの先は行き止まりで、拡張工事でもしているようだ。

ダイダイ（アジュガは影）を見つけるとオークが鞭を振るいながら何かを叫ぶ。

一斉に手にした道具で襲い掛かってきた。

「アドバンス、あるか？隊長」

影に潜んだままのアジュガに声をかける。

アドバンス？ 尋ね返すも時間の無駄だろう。アドバイスだ。

「こういう場合は、頭を叩く」

「なるほど、おりゃっ」

手にした太刀を大きく振るうダイダイ。

それは顔を狙ったものでゴブリンは腰を抜かしたようにしゃがみこみ、どれにもヒットしていなかった。

「あほ、」

いつの間にか、アジュガは一番奥のオークの横に背を向けて立っていた。

彼はつながっている影を移動できる。

その手のナイフはオークの首筋で銀色に光った。

「頭というのは顔ではなく、トップのことだ」

言い終わると同時にナイフがオークの首を刎ねた。

「あ、そうなの」

ダイダイは太刀を構えなおした。

ゴブリンたちはあせった。リーダーは一撃で倒され、巨大な武器を自在に操る男とに挟まれている。

彼らは立ち上がることなく、土下座した。

「あ？」

その中の一匹がつたない共通語で語りかけてきた。

「タ、タスケテ」

腰に下げていた小さな袋を差し出す。

すると次々にゴブリンは袋を差し出した。

一匹が広げて見せるその小袋は彼らの財布のようで、中にはわずかの金貨が入っていた。

「ああ、もう」

ダイダイは太刀を納めた。

「やる気がなくなった」

「甘ちゃん」

降伏したゴブリンたちから『一番奥にワインが置いてあり、その手前にボスがいる。トロールは金貨を渡せば大人しい。』などの情報を手に入れた。

ここも行き止まり（開発中）なので、先の広がった道へと戻る。

そこは床に裂け目が走っており、橋が掛けられている。

その向こうに椅子に座る、トロール（とがった鼻に後退した額の大型野人）の姿。

とりあえず、ダイダイは橋を渡った。

「ここを通りたかったら、俺様に一人につき金貨10枚よこせ！」
トロールは大手を広げて道に立ちふさがった。

「どうする？」

「お前が戦わないなら、俺が戦う」

「じゃあ、」

ダイダイは太刀を抜いた。

「答えはこうだ」

トロールにも意味が分かったらしく、ブラジオン（木の棍棒）を持ち上げた。

それを力任せに振る。ダイダイは太刀で受け流す。

トロールは振り続け、ダイダイもそれに追いつきはじく。

ブラジオンは片手で持てる60cm程度であるが、ダイダイが両手で持つ太刀は2メートルを越えている。

しかし速度的に早いのは、ダイダイであった。

「ぐうっ」

押されている事が分かったトロールは更に大振りになった。

その隙を見逃さず、ダイダイは下から切り上げる一撃を放つ。

トロールは二つに切れた。

「何か、言うことは？アジュガ」

ダイダイはちよつと自慢げだった。

「太刀にダメージを受けすぎだ」

「ふんっ」

あたりをうかがうとトロールの椅子の下に金貨180枚があった。

先へ進むと奥へ道は続き、左右に扉が見える。

まず、右の扉を手にした。

しかし開かない。鍵がかかっているようだ。

「開けるか？」

ダイダイは潜っているアジュガに尋ねると影は立ち上がった。

「こんな鍵など、」

アジュガが触ると一瞬で鍵が開いた音がした。

部屋に入ると2m以上の段差で下が見える。

暗いその下を覗き込もうとすると突然、ダイダイは足をつかまれた！

「おわっ！！」

驚いた彼は軽く飛んだ、そして落ちた。

「いててて」

両足で踏ん張る形にダイダイはなった。

見るとそこは人間、オーク、ゴブリンの死体が無造作に投げられていた。

「ゾンビー（動く死体）だ」

アジュガが言うように、先ほどダイダイの足を掴んだのは目の前のゾンビーのようだ。

他にも2匹の立ち上がる死体が見える。

「うおらっ」

ダイダイにとってゾンビー3匹など瞬殺である。

しかし背中長い太刀が動きを制限し、段の上に返るのが難しかった。

何とか太刀を背負ったまま両手両足を使って登ったダイダイを見ながら、先に太刀だけあげればいいのに、と思った。

左の部屋を確認するとゴザや物が乱雑に転がっている。

どうやらゴブリンやオークたちの居住空間のようだ。

物あさりに興味がないダイダイたちは部屋にも入らず、先へと進んだ。

大きな鉄の扉が目の前に見える。わき道はもう、ない。

「ここだな」

構えるダイダイにアジュガも影から実体化し長い鞭を持つ。

「いくぜえ」

鍵のない扉を開けると一際大きいオーク（リーダー）と普通のオーク2匹が食事をしていた。

オーク・リーダーは何かを愚痴ると横に置いてあるブロードソード（真直ぐな剣）とバックラー（小さな丸盾）を構えた。

オーク2匹もそれぞれに構える。

まず一匹目が挑みかかってくる。

それをかわし、胴を一気になぎ払うダイダイ。

2匹目はアジュガに挑むが、届く前に鞭によって打ち倒された。

オーク・リーダーが大きく剣を振り上げて、アジュガにおろす。

彼はそれをかわして反撃しようとするが、その横腹目掛けてバックラーを振り回される。

余裕で避けるが、距離をとったアジュガはさすがに慣れている、と敵を少し感心した。

リーダーに向かってダイダイが袈裟切り。しかしバックラーで軌道を変えられ、ヒットせず。

今度はダイダイに向かって剣を横から振るうが彼も太刀を縦に構えて受けた。

その隙を狙ってアジュガが鞭を振るい、バックラーを弾き飛ばす。
「ブモ〜〜」

リーダーは見て分かるほど怒り狂い、アジュガに向かって一直線に進む。

アジュガは一步でかわし、ダイダイの横につく。

すると今度はダイダイに向かって一直線。

斜めに振り下ろされた剣にダイダイも太刀をぶつけ、つばぜり合い。

そこへアジュガが鞭を振るい、オーク・リーダーの腕を、身体を、足を絡め取り、動きを止めさせた。

「ブツモ〜〜〜〜」

「おらよっ！！」

自由になったダイダイが太刀を横から振るった。

オークの首が空を舞う。

オークの食事は人間が食べれるものではなく、ダイダイは少し寂しそうだった。

その部屋では金貨420枚と何処かの鍵（恐らく死体置き場）、銀色のプレートを見つけた。

プレートは一番入り口と抜け落ちた同じサイズで、それを奪ったものであるう。

何処かの地図らしきものが書かれているが、ダイダイたちには分からなかった。

後でソリダスターに渡す事にする。

ワイン樽は隣の部屋、一番奥においてあった。

ちなみにダイダイは目的を完全に忘れていた。運動できて満足しているみたいだが。

奪われた二つのうち、一つは無事であったが、もう一つは半分くらい、飲まれていた。

普通は二人で転がし運ぶであろう大樽をダイダイは嬉しそうに両肩に一個ずつ乗せ馬車へ戻った。

村に戻る途中、ダイダイはアジュガに「何処に行くのか？」尋ねたが彼は影の中でだんまりを決め込んでいた。

「おい、アジュガ」

村に戻ると大変喜ばれ、村長他から謝辞を受けた。

バイゼルに届けるのは樽一つでもう一つは予備だった。

そのワインについて尋ねると予備から一口分けてもらえたが、飲める程度でおいしいものではない。

新作は新作であり、その事に価値があるそうだ。ダイダイにはよく分からないが。

今はアジュガも実体化して、しかし身体を隠すように布のフードマントをかぶって祝の席についている。

彼の種族はモンスターのため、人前にあまり姿を見せることはできない。

そこにはわざわざ隣町に買いに行ったというビールが山ほど並んでいた。

風呂から出てきたダイダイは大喜びで振舞われる酒に料理に飛びついた。彼の一存で村人全員を呼び出し、酒盛りを始める。

それを後ろから眺めながらアジュガは、報酬としてもらえる貴重な酒の話は忘れているんだろうな、と考えた。

そもそも美味しい酒を飲みにきたのだらうに、こんなに普通のビールで喜ぶとは。

そして、あの最後のオークは1対1で十分だった、そんなことを考えている。

一晩行われた宴の後、ダイダイはすっかりご機嫌で大手を振って村を離れた。付き合わされた村長はじめ、村人全員グロッキー。

アジュガは酒には興味なく、口に出さない。

やはり名酒は忘れられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7543o/>

Wine collection

2010年11月6日21時55分発行